

# 戦前絵日記に見る、絵本作家 加古里子の素顔

鈴木万里

(加古総合研究所)



一九三八年、小学校卒業を迎えた一人の少年が一冊の絵日記を書き上げた。日に日に戦時色が強まる社会の気運をありのままにとらえ、色彩豊かな挿絵とともに書き綴つた少年の名は中島哲。のちの絵本作家・加古里子である。長女として加古の活動を支えた鈴木万里が、半世紀以上の歳月を経て発見された父の絵日記について語ってくれた。

その後、東京帝國大学在学中に戦争が激しくなり、三重県の山奥にある父親の郷里に疎開。

当時住んでいた東京・板橋の家は焼けてしまつたそうです。終戦ののち、九月から大学の授業が再開されるというので、父は一人で東京に戻り、家族は京都府の宇治市に住むことになりました。そこで、父の父親、つまり私の祖父はすぐ亡くなり、母親とお姉さんが長らく住んでいたのですが、お姉さんも一二、三年前に亡くなりました。そのときに整理した荷物の一つとしてこの絵日記を宇治の家から持ってきたのだと思います。父には、家中の隙間になんでも突っ込んでしまう癖がありまして、これも適当な隙間に入れていたのでしょう。本人もすっかり忘れていたところ、偶然出てきたというわけです。

## 書いたものには、必ず日付を

です。だから、源流はこれだけではないということを言いたかったのでしょうか。

新聞の切り抜きや人から聞いた話の感想など、もっと時代に対する思いを辛辣に、思つたとおりに書いていたものがあつたというのです。それは板橋の家が焼けるときに一緒に焼けてしまつた。空襲警報が鳴つたとき取りに戻ろうかと思ったけど、戻つていたら逃げ遅れるかもと思い、仕方なくあきらめたと言つています。

とにかく時間があつたら絵を描く、字を書く人なんです。この絵日記は、戦火を逃れた、とても強い運命を持った一冊だと思います。

ちなみに、ふだん父は日記は書きません。だけれど、何か思ったことや観察したことを書き留めるときには、必ず日付を書いているので、ある意味では日記的とも言えるかもしませんね。たとえば、家族と過ごすなかで、感じたことや考えたことを詩や俳句として残すのです。俳句は高校生ぐらいから始めて、書籍化はしていない自分だけの詩集や句集も持つてているのですが、それにも必ず日付が書いてあります。

原稿もそうです。何回も何回も推敲するのですが、その日付を入れておいて、半年なり一年なり二年なり、忘却の時間をつくつてからもう一度読み返して、定稿となるまで、赤を入れて、も、父は膨大な量の日記を書いていたそなうなの

この絵日記が出てきたのは、二〇一五年四月一〇日。父が「こんなものが出でてきた」と、すぐこうれしそうな顔をして書齋から持ってきたんです。母も私も、見たことはもちろん、話を聞いたこともない。「何これ?」と聞いたたら、「小学校卒業のときに書いたんだ」と。

当時、国語の授業で先生が教卓の上にドサツと原稿用紙の束を置いて、「小学生時代をまと

めなさい。何枚でも思うとおりに書け」と言ったのだそうです。父は幼いときから書くことが大好きだったようですから、その束を見てとてもうれしかったのだと思います。文章は授業中にほとんど書き上げたらいいのですが、絵のほうは授業の時間だけでは足りず、家に持ち帰つて描いたと言つっていました。なので厳密には日記というよりも、回想録に近いものです。

その日付を入れて……という作業を繰り返します。根が理系の人なので、実験日を書き入れる習慣があつたからなのかもしれません。

## 絵日記で蘇る、戦前の記憶

この絵日記を初めて読んだときは、本当に「すごい」と思いました。父が小学生のころに描いた絵は初めて見ましたが、まさか小学生がこんな絵を描くなんて。絵と文のレイアウトも、とても小学生の発想とは思えないものが多くて、感心しました。絵日記は父自身の手で製本してあります。表紙には手書きで「過去六年間を顧みて」とあります。「顧みて」なんて、小学生の言葉遣いとしては少し難しいように思えますが、父曰く、やはり当時は辞書を引いてこの漢字を書いたのだそうです。今でこそ、出版される父の絵本のタイトルはデザイナーさんが書いています。父が卒業した小学校は当時としては珍しく、割と美術教育に熱心だったそうです。「これは」と思う子は放課後に残してポスターを描かせてみたり、コンクールに出させたりしていたのだとか。父も、選挙についてのポスターを描いた